

「局」文芸と「座敷」芸能に就いて

—中世文芸の詩的発想とその時代的構造—

亀 谷 敬 三

序 「局」における「座」の標識

- 一 「もの」・「ほど」を支える詩的発想
 - 二 「物語」・「随筆」と劇的場面の展開
 - 三 「座敷」文芸と「座敷」芸能
- 結 「座」の時代的構造

序 「局」における「座」の標識

中古の文学は、①「後宮・齋院・齋宮を、サロンの環境として発生し成長した。」と説かれているが、「局」を中心とする女房生活の場が、はたして、いわゆる「サロンの環境」という概念でのみ理解されるであろうか。「局」として、後宮の殿舎には、先ず清涼殿の内には、藤壺上の御局、弘徽殿上の御局があるし、また温明殿・後涼殿など、十二殿舎を挙げることができよう。

後宮の女房には、名家の才媛が侍っていた。

清少納言が、「宮に始めて参りたるころ、もののはづかしきこと、数知らず。」『枕草子』(岩波本第一八一一段)と、書いているのは、才媛の群がる宮廷の雰囲気気圧された、とまどいでもあろう。「

もののはづかしき事」の「もの」が、「サロンの環境」を構成する主要な要素であるとしたら、それを、如何なる点で、西欧的な、いわゆる「サロンの環境」と識別しなければならないのであろうか。「もの」に日本的な意義がありはすまいか。

ドナルド・キーン博士の『日本の文学』(吉田健一訳)には、「古今和歌集」序における紀貫之の歌論を評して、さて、「詩が恋愛の媒介をする。」というのであるが、「ヨーロッパ各国の国語で恋愛詩が書かれ」る場合に、「欧米の読者には、もう少し説明しなければならぬことかも知れない。」と説いて、われわれは、「源氏物語」のような日本中古の「宮廷生活を扱った日本の小説」を読んでみて、「始めて、詩というもの」が、「そういう場合に役立つものであること」を知ったと述べている。キーン博士の指摘する如く、「源氏物語」を読むことに拠ってしか理解し得ない、もしくは、「源氏」を読むことに拠ってのみ理解し得る、「恋愛詩」の日本的性格が、読み取られるとしたら、池田亀鑑博士の指摘する、「サロンの環境」の意義に就いて、理解を深めようとするためには、「局」を中心とする女房生活の在り方が、中古の文芸作品の成立に、ど

のような関連性をもっていたかを、究明しなければならぬであろう。

中宮(彰子)が、若宮(第二皇子敦成) 出産(寛弘五年一(一〇〇八) 九月十一日)の後、土御門邸から参内した(同十二月二十九日)時の事を、紫式部は、「しはすの二十九日にまゐる」と記し、彼女自身の新参の思い出に關して、回想する。

はじめて参りしも、今宵のことぞかし。いみじく夢路に惑はれしかなと思ひ出づれば、こよなく立ち馴れにけるも、疎ましの身のはど。やおはゆ。(『紫式部日記』)

と追録している。紫式部の宮仕えに出た時期に就いては、諸説がある。仮に、寛弘三年(一〇〇六)を、初出仕の年と見ても、「はじめて参りしも今宵のこと」と回想した時点が、「疎ましの身のほど」と感じた「ほど」の内容に、どのような意義をもたらずのであろうか。そして、また、その回想と追憶が、「局」を中心とする女房生活、ないし「局」に成立した文芸作品の評価を、如何に性格づけることになるのであろうか。

「局」の語意は、「言海」に、「引キツボネル処ノ意」と解き、「宮殿などの中に、別に隔てある室」と説いている。いわば、女官の部屋である。「座敷」の意義に就いても、「言海」には、「客ノ座ヲ敷ク所ノ意カ。」と解き、「家の内の一室に、専ら客を延き請ずるに用ゐる所、客間。」と説かれている。「局」は、殿舎建築の一棟の建物から観れば、全体の部分として、局限された一区劃の密室を意味する。その域内は、女房の詰所・座席として特設された、或る意味では私室である。壁に仕切られ、固定した場を占めている

「局」文芸と「座敷」芸能に就いて—中世文芸の詩的発想とその時代的構造—

が、必要に応じて、畳を敷き、屏風・几帳などで立て仕切り、仮設される場合もある。「局」の意味が、男性の世界から隔絶した、いわば女性専用の密室的役割を離れた単なる詰所・座席の場から、主客対坐する客室の場として、開放的な「座敷」の意味に転じるとき、「局」を中心とする女房生活の間に成立する女流文芸の性格は変質せざるを得ない。もちろん、そこには、時代的発想の特異性も見出されるであろう。それにしても、「局」「座敷」の意味の基調となつている「座」の概念を成すものは、文芸ないし芸能における詩的発想に、どのような標識をもたらずのであろうか。

世阿弥が、「座敷」を、芸能座の見物席—観客の座席の意味に解して、「座」の構成に一つの標識を見出しているのは、中世文学の場を構成する、「座敷」のもたらす芸能的意義に触れたものである。連歌の「座」における文芸的な意義とは、異質な特性がある。人、群集して、座敷いまだ静まらず。さる程に—見物衆、申衆(さるがく)を待ち兼ねて、数万人の心一同に、遅しと楽屋を見る所に、(シテ)時を得て出で、一声(いっせい)をも挙ぐれば、やがて座敷も、時の調子に移りて、万人の心シテの振舞に和合して、しみじみとなれば云々。『風姿花伝』(第三「問答条々」)というのである。「時を得て」「時の調子に移りて」など、ここにいる所の「時」は、「局」のもつ「座」の文芸的意義から、何を承け継いでいるかを示唆する標識となるのではあるまいか、また、その承け継がれたものを、どのような時代的発想の形として、詩人は受け留めているのであろうか。

1 「もの」・「ぼど」を支える詩的発想

「女房」という名義は、②「局を賜わって住む婦人の意」と解かれているが、「局を賜わる」には、「一人で室を賜わる場合」と、「他人と同居するような場合」がある。いづれにしても、「局」を中心とする女房生活から生まれた文芸作品に、和歌・物語・日記・隨筆といったジャンルがあるということは、「局」を構成する文芸的意義の中に、「時間」・「空間」の問題を突き留めてみることに拠って解明されるのではあるまいか。

清少納言が、「宮仕（みやづかへ）する人をば、あはあはしう、わるき事に思ひ居たる男こそ、いと憎けれ。」（『枕草子』第二段）と言ひ、「内侍などにも暫しあらせばや。」と主張しているのは、中宮（定子）・伊周の母（高階貴子）が、内侍として宮仕え（高内侍）して、いたことを弁護する意味があったといわれるが、「宮仕する人」を「あわあわしう、わるき事」に思っている男性への反撥であると観ることもできよう。もし「いと憎けれ。」と書かれている言葉の意味から、男性に対する女性の抵抗を想察し得るとすれば、この、「もの」・「ぼど」の語意を通して、女性の在るべき姿を、いかに反映しているかに就いて、考えてみることも可能であり、有意義でもあらう。

例えば、清少納言が、宮仕人として新参の頃、「ものの恥かしき事」を「数知らず」体験したという、「もの」を構成する觀念の中に、「局」の内・外を構成する、心理的・物理的の諸要素が、「局」を中心とする女房生活の文化生理として、いかに吸収されている

のであらうか。

また、それが文芸作家の詩的発想をいかに触発しているのであらうか。

もの暗うなりて、文字も書かれずなりたり筆も使ひ果てて、これを書き果てばや。この草紙は、目に見え心に思ふ事を、人やは見むとすると思ひて、つれづれ（徒然）なる里居（さとる）のほどこに書き集めたるを、あいなく、人のため便（びん）なき言ひ過ぐしなど、しつべき所々もあれば、よう隠したりと思ふを、心より外にこそ漏り出でにけり。（『枕草子』第三〇〇段）

「もの」という語は、「こと」という語の対称として、概念的には、「こと」が、言語意識の発想に確然とした場合に用いられ、「もの」は、漠然とした場合に、発想される。重要な点は、「局」の環境を形成する雰囲気をつめるための発想、ないし表現、または演出に、「もの」という語が充当されることである。特に注目されるのは、「もの」という語が、「ぼど」という語と、概念的に関連づけて、理解される点である。「ぼど」という語の内容には、概念的に、二つの要素がある。「時間」と「空間」である。時間的にも、空間的にも、距離、間隔を意味する概念作用が、この語の言語意識に働き掛けている。この隔離感が、「局」を中心とする女性の世界と、外から「局」を取り巻く男性の世界とを隔離させたものを、詩的発想の主題として場面的な展開の中に取り上げている。

先ず、物語的発想と、「局」文芸との関係である。清少納言が、新参の宮仕人として、いかにこの「もの」の世界を体験したのであらうか。

清女は、「ものの恥かしき事」を体験する場で、「もの」の実体を突き留めた。

中宮(定子)の兄―後に大納言に叙任された伊周―であること、
を、「御几帳の綻(ほころび)から、「わづかに見入れ」る姿勢で確認したのである。

「もの」を捉える姿勢と、「もの」の在るべき状態を証示する場面を清少納言は、次の如く描いている。「雪」の中の参内である。

御直衣、指貫の紫の色、雪に映えてをかし。柱のもとに給ひて(伊周)「きのふ今日、物忌にて侍れど、雪のいたく降りて侍れば覺束(おぼつか)なさに。」など、のたまふ。(中宮)「道もなしと思ひけるに、いかでか。」とぞ御いらへあなる。うち笑ひて、(伊周)「あはれともや、御覽するとて。」など、のたまふ御有様、これよりは何事かまさらむ。物語に、いみじう口にまかせて言ひたる事ども、たがはざめりと覺ゆ。

「局」の雰囲気は、とかく沈澱しがちな空気として満ちている。「つれづれ」の場を形成する。「つれづれ」は「もの」の象徴である。

この場の単調を破るのは対話である。その対話の頂点には、和歌がある。「拾遺集」(巻第四―冬)に、

山里は雪ふり積みて道もなし

けふ来む人をあはれとは見む (兼盛)

とあるのを踏まえての発想である。兄妹ではあつても、中宮と、その兄である。隔絶の壁を破って温い肉親愛の交流が、美しく描かれている。清女は、この情景を、美意識のレンズに焦点を合わせる。

「局」文芸と「座敷」芸能に就いて―中世文芸の詩的発想とその時代的構造―

- (A) 雪のいたく降りて侍れば、覺束なさに、
- (B) 道もなしと思ひけるに、いかでか。
- (C) あはれともや、御覽するとて。

一首の和歌が、(A)~(C)の三節に分断されて、しかも、それを、抒情詩的精神で繋ぎ留めている。特に、その抒情詩的発想に先行する、叙事詩的発想が注目される。物語小説の基調が、叙事的抒情詩的発想として、「局」文芸の基底に存在する点を強調したい。中宮(定子)が、「白き御衣」(おんぞ)どもに、紅の唐綾二つ、白き唐綾を召し、それに、黒い「御髪(みぐし)のからせ給へる」姿など、「絵にかきたるをこそ、斯かることは見るに、うつつ(現)には、まだ知らぬを、夢の心地」で、清少納言は、「ほど」の場における「もの」の実態を捉えている。

「もの」の実態を突き留める場を構成する、二つの要素がある。それは、「人間」と「自然」である。人間は無限性の自然を通して、人間であるべきことを確認する。有限性の人間は、斯うして、永遠への可能性を獲得する。「もの」の実態は、斯うした境地で捉えることができる。これを支える主体性は、宇宙の真理、ユニヴァサリティである。詩人の詩的発想は、このユニヴァサリティに支えられて、永遠性を享受する。自然は、「局」の環境を構成して、四季の季節的変化を見せる。「局」の自然的環境のうち、現象としての「雨」と「雪」は、恰適の文芸的素材として詩的発想の対象である。対象であるとともに、「局」文芸における主要な課題である。

二月末日の頃、「雨いみじう降りて、つれづれ」の夜のこと、頭中將舟信は、清少納言の学才を試みようとした。白居易の詩の一句を

書いた。「蘭省花時、錦帳下」と書いて、「末はいかに」と問うた。この句の対句に、「盧山雨夜、草庵中」とあるのを、答えさせようとした。

これが未知り顔に、ただたどしき眞字(まんな)に書きたらむも、見苦しなど、思ひまはずほどもなく、責め惑はせば、ただ、その奥に、炭櫃(すびつ)の消え残りたる炭のあるして、「草の庵を誰かたづねむ」と書きつけて取らせ

「枕草子」(第八〇段)

「もの」の場の雰囲気、**「局」**を中心に、空間的に広がることも、時間的に延びる所に、実存的なスペースとして、「実間」の場が成立する。「もの」を「語る」文学、「物語小説」を詩的に発想する現場である。清女に付けられた下の句に対する上の句を付け煩う。「ほど」は「実間」としてのスペースである。

「この事、必ず、語り伝ふべきことなりとなむ定めし。」と、**「(経房)」「御名は、今は草の庵となむ附けたる。」**とて、急ぎたち給ひぬれば、(清少)「いとわらき名の、末まであらむこそ口惜しかるべけれ。」と言ふほどに、修理亮(すりのすけ)則光「いみじきよろこび申しに、上にやとこ参りたりつる。」と言へば云々。

物語などして居たるほどに、「先づ」と、召したれば、参りたるに、この事仰せられむとてなりけり。

「もの」を「語り」、「こと」を「叙べる」叙事的抒情詩的発想である。このことは、『古今集』序に、「世の中に在る人、事わざ繁きものなれば、心に思ふことを、見る物、聞く物につけて言ひ出

だせるなり。」と主張されている、和歌の抒情詩的発想が、「事わざ」に対し、「心に思ふこと」叙事的に発想する、いわば、叙事的抒情詩的発想の意義を承継ぐ、物語小説成立の本質を証示するのであろう。「もの」を「ほど」の場で語る。「局」文芸の成立である。

二「物語」・「随筆」と劇的場面の展開

「源氏物語」より以前の、「古物語」は、とにかくとして、道長の時代を中心とする、外戚政治の時代の文芸では、^⑧「多くの物語は、ただ女性の颯た、現実の描写」であった。いわゆる「世の中」は、彼女たちの生きていた、「後宮の生活」であり、物語小説の登場人物、ないし、「日記」「随筆」の文学に登場する人物は、「作者より、一階級高い人物」であり、男の主人公は、「後宮に出入する時だけの男性の一面」として、捉えられたものであった。「ほど」という語に限界づけられた「実間」の場は、「局」を中心とする女房生活に接触する男性生活の断面である。「局」の内部分よびその周辺に醸成された「もの」の世界が、「もの」の「あはれ」さの主題を発想する対象で満ちているか、「こと」の「をかし」さの主題を発想する対象で充たされているか、また、その「あはれ」さが「をかし」さに転換されるか、「をかし」さが、「あはれ」さに転換されるか、それに拠って、「局」文芸のジャンルと、その主題性に異同を生じてくる。紫式部は、「まして、思ふことの、少しなめなる身ならましかば、すきずきしくも、もてなし、若やぎて、常なき世をも過ぐしてまし。」と日記して、「ほど」の限界に迫ってゆく。

めでたきこと、おもしろきことを、見聞くにつけても、ただ、思ひかけたりし心の、引く方のみ強く、もの憂く、思はずに、歎かきことのみまさるぞ、いと心苦しき。今は猶ほ、もの忘れしなむ、思ひ甲斐もなし、罪も深かりなど、明け立てば、打ち眺めて、水鳥どもの、思ふことなげに、遊び合へるを見る。

水鳥を水の上とやよそに見む

われも浮きたる世を過ぐしつつ

かれも、さこそ、心を遣りて遊ぶと見ゆれど、身はいと苦しかなりと、思ひよそへらる。『紫式部日記』(「行幸も近くなりぬとて」)

さし当りて、おのづから睦び語らふ人ばかり、少しなつかしく思ふぞ、ものはかなきや。大納言の君の、夜々(よるよる)は、御前に、いと近う臥し給ひつつ、物語し給ひしけはひの恋しきも、猶ほ世に従ふ心か。

うき寝せし水の上のみ恋しくて

鳴のうはげにさえぞ劣らぬ

かへし、

うちはらふ友なき頃の寝覚めには

つがひしをしだに夜半(よは)に恋しき

書きざまなどさへ、いとをかしきを、まほにもおはする人かなと見る。

(同上、(「御前の池に水鳥どもの」)

と日記する、物語文学作者の、孤独と寂寥の姿が、「もの」の壁を乗り越えて、「水鳥」を媒体に「ほど」の限界を拡大する。

「やまと歌は、ひとの心を種として、よろづの言の葉とぞなれり

「局」文芸と「座敷」芸能に就いて——中世文芸の詩的発想とその時代的構造——

ける。」といった貫之の主張に窺られる、「ひとの心」——顕昭本に「ひとつ心」とあるのが、「よろづ」に対応するといった窺方は、合理的ではあるが、「花に鳴く鶯、水に棲む蛙の声を聞けば、生きたし生けるもの、いづれか歌を詠まざりける。」という説き方に對して、より合理的に、詩的発想への適性を見出し得るのではあるまいか。「心」と「誠」の関連性と、歌の「姿」への調和を説く理解の在り方は、後の歌論・連歌論、さては、世阿弥の能楽論に至るまで、「もの」を通して、「ほど」に迫る詩的発想である。久松潜一博士は、①「心と詞とを對立的に見て、その調和を説くこと」から生まれた、「ものあはれ」の萌芽的なものを、「源氏物語」への系譜と指摘されている。ただ「心と詞」は、「對立的」というよりは、寧ろ、少なくとも、実存的對立の關係において、人間と自然の呼応關係の中に撰取されたものと窺るべきではあるまいか。このことは、叙事詩的発想性において「人間」世界を対象とする作歌意識、ないし態度を、「自然」の世界が対象となる場合の、作家意識、ないし態度に複合させてみると、②叙事的抒情詩性の発想、ないし表現の形態として、「歌」を「詠む」ことの意義を証示するものである。もちろん、「源氏物語」への系譜として、その主題「ものあはれ」にも發展する理論的根拠を示すものである。「物語」の発想と「日記」の発想、また、「隨筆」の発想と、「説話」の発想、斯うした系譜に支柱となる、和歌詩的発想と連歌詩的発想は、「局」文芸における二つのジャンルを大別する基調である。しかも、「伊勢物語」・「源氏物語」・「平家物語」等を「本説とする猿楽能」に通じる劇的場面の構想に、行動詩的役割を果たしている意義を、「局」文芸か

ら「座敷」芸能への発展として注目して置きたい。世阿弥は、「本
説正しく、珍らしきが、幽玄にて、面白き所あらんを、よき能と
は申すべし」(『風姿花伝』(第三、「問答条々」))と説いてい
る。「座敷」芸能に至って、「ほど」の限界は極まる。

三「座敷」文芸と「座敷」芸能

天皇が、詩の題目を示して、即興の歌を、侍臣・侍女にお詠ませ
になった風雅は、「古今集」以前はもとよりのこと、「局」文芸に
基底する「みやび」のジャンルとして挙げられる。村上天皇の時代
のこと、「雪のいと高う降りたりける」を、「やうき」(様器)に
盛らせて、梅花を挿し、「月のいと明き晚」に、「これに歌よめ。
いかが言ふべき。」と、「兵衛の藏人」にたまわった。

女藏人(をんなくらど)の兵衛は、即座に、「雪月花の時」と奏
上する。みかどは、非常にお褒めになった。

歌など詠まむには、世の常なり。斯う折に合ひたる事なむ言ひ
難き。(『枕草子』第一七九段)

という仰せ言をたまわったのである。白楽天の「寄殷協律」
詩に、「月雪花時、最憶君」とあるのを、引用した機転、機智を
嘉されたものである。また、同じ「兵衛」を、御供にして、天皇は、
人の居ない殿上の間に出御になった。

殿上に、人さぶらはざりけるほど、竹(たたず)ませおはしま
すに、炭櫃(すびつ)の煙(けぶり)の立ちければ、(天皇)「
かれは何の煙ぞ。見て来(こ)。」と仰せられければ、(兵衛)

見てかへり参りて、

わたつみのおきにこがるる物見れば

あまの釣してかへるなりけり

と、奏しけるこそをかしけれ。

蛙(かへる)の飛び入りて、焦(こ)がるるなりけり。

(同上)

と、清少納言は書き留めている。また、「(清女が、細殿(の局)
に、便(びん)なき人」を泊めて、曉に笠ささせて出でける。」と
いった噂が立つと、本人の清女自身すら知らずにいたところに、中
宮(定子)から御文が届けられた。「返事ただ今。」と言うので、
「何事にか。」と想って、見れば、「大笠」の絵が画いてあって、
「人」は見えない。ただ、手だけ、笠を握らせて、その下に、

三笠山やまの端あけし朝(あした)より

と書いてある。清女は驚き且つ恥じた。「さる虚言(そらごと)
などの出で来るこそ、苦しけれど、をかしうて、」別の紙に、「雨
をいみじう降らせ」で、その下に、

雨ならぬ名の降りにけるかな

と書いて、「さては、濡衣(ぬれぎぬ)には侍らむ。」と書き添
えた。連歌詩的発想として生まれた「秀句」である。「局」の女房
生活に漂う、「徒然」の雰囲気突き破る、連歌的、そして、それ
は、また、行動詩劇論としての、世阿弥の能楽論に通じる、「座敷」
芸能への萌芽である。世阿弥は、『習道書』に、「狂言の役人の
事」に就いて、

これまた、をかしの手立(てだて)、或は、ざしきしく、又は、

昔物語などの、一興ある事を、本木（もとき）に取成して、事をする、如此。

と言つて、「幽玄」の狂言に触れ、狂言は、「問（あひ）の狂言」として、「信（しん）の能のみちやり（道行）をなすこと、「笑はせんと思ふあてがひは、先づあるべからず。」と説き、「ただ、そのことわり（理）を辯じて、見聴の道理を、一座に言ひ聞かするを以て道とす。」と述べ、特に、「をかし」の本義に触れ、

抑、をかしとは、必ず、数人の笑ひどめく事、職（しよく）なる風体なるべし。笑みの内に楽しみを含むといふ、是は、面白く嬉しき感心なり。この心に和合して、見所人（けんしよにん）の笑みをなし、一興を催さば、面白く幽玄の上階のをかしなるべし。

と主張している。ここで、いわゆる「さしきしく」は、⑥「座敷秀句」であろう。「座敷」の「秀句」である。能勢朝次博士は、鈴木暢幸氏の「座の即興」説を取り上げて、⑦「私は鈴木氏の説が妥当であると思ふ。」と述べている。もし、「座敷」の秀句が、狂言の「秀句傘」や、「今参」の如く、諧謔・滑稽の対話性のものであるとすれば、藤原明衡の「新猿楽記」に書き留められて、⑧猿楽能の源流と認められる、雑芸的演技の狂言性にまで遡ることができよう。私は、物語文学の下降期、いわば藤原時代の頂点において、殆んど、時期を同じうして、「枕草子」「源氏物語」とともに、「新猿楽記」の成立していることを重視したい。このことは、「問の狂言」の本質として、世阿弥の強調している、「幽玄」の本義が、「をかし」と「あはれ」を、「みやび」と実存する「さとび」の雰囲気と

して、「能」の「座敷」に横溢している点から観て、また、「枕草子」に漲る「をかし」や、「源氏物語」に溢れる「あはれ」を実存的に調和した、「さとび」の雰囲気、平安朝宮廷の「局」を圍繞している点から観て、「局」と「座敷」に通じる文芸精神として探し求めることができるのは、「さとび」の心であろう。

中世的にして、しかも中古的な、また、中古的にして、しかも中世的な幽玄性と観ることができのではあるまいか。「さとび」が、幽玄性の中世的発想の美意識を象徴する文芸精神であると観られるならば、「みやび」は、幽玄性の中古的発想の美意識を象徴した文芸精神であると観られるであろう。美意識の時代的発想によつて、文芸の局面的意義に異同を生じて来る。「伊勢物語」に、巻末を飾る。

つひにゆく道とはかねて聞きしかど

きのふ今日とは思はざりしを

この歌は、「むかし、をとこ、わづらひて、心地死ぬべく覚えければ、」といった、叙事詩的境界、抒情詩的境界に立つ人間の、真実の声である。次の歌は、「新古今集」（卷十三恋三）に、「中の関白（道隆）かよひそめ侍りけるころ」といった詞書をもっている。

忘れじのゆく末までは難ければ

今日を限りの命ともがな

藤原道隆の妻となり、伊周と、中宮定子の母となった。いわゆる高内侍（貴子）の歌である。二つの歌の内容は、作歌事情が相違するので、それぞれ比較の対象にはなりにくい。作歌意識が、前者で

「局」文芸と「座敷」芸能に就いて—中世文芸の詩的発想とその時代的構造—

は、「今日」の一日に関して、「思はざりしを」と言ひ、後者では「命ともがな」と言つて、それぞれ、「今日」を捉えにかかる詩的発想が異なっている。ひとしく「今日」の一日ではあるが、後者に「行く末の」不安があるにしても、前者は、絶望の歌である。共通にいえることは、「今日」に直面する、自己の命を直視しているということである。前者には、いささかの誇張も、虚偽もない。「今日」に生きようとする人間の切実の態度が、あるがままに、最初の声を遺す歌として詠まれたものであろう。しかし、後者には、心理的な自己分析がある。瞬間の恋に情熱を傾ける歌としては、理知に傾いている。「局」を中心とする女房生活の間に、時代の波がいかにか打ち寄せるにしても、「局」の岸にある防波堤は、その波をいかに受け留めたのであろうか。次の二首は、それぞれ「枕草子」の作者、「源氏物語」の作者として、知名の詩人の歌の例に、「百人一首」に採択したものであろう。「新古今集」(巻十六)に、

めぐりあひて見しやそれともわかぬ間に

雲がぐれにし夜半の月かな

紫式部の歌である。「後拾遺集」(巻十六)に、清少納言の歌として、

夜をこめて鳥のそら音ははかるとも

よに逢坂の関はゆるさじ

両者の歌の内容は、作歌事情とともに、詩的発想の相違している点は、それぞれの詞書に拠つて証示されている。「局」に瀰漫する「もの」の雰囲気、「つれづれ」の「実間」として停滞するとき、女房たちは、「自然」の世界に「ほど」の場を掘げ求めようとした。「雨が

ちにて曇り暮らす、」五月の初め、「つれづれなるを、時鳥の声たつねありかばや」と、清少納言の提案で、「われもわれも」と「賀茂の奥」に出かける。「稲といふものを観たりするうちに、「時鳥の歌詠まむ」としたことも忘れてしまふ。(「枕草子」第九七段)中宮(定子)の伯父明順の家で、「この下蔵(したわらび)は手づから摘みつる」と、もてなされ、「まかなひ騒ぐほどに、(車副)「雨降りぬべし。」と言」はれて慌てて車に乗る。中宮の御前に参ると、中宮から「さていづら、歌は。」と言はれ、「ここにても詠め、」と促され、「言ひ合はせなどするほどに、「一条大路を走りながら、跡を追つて来た藤侍(公信)に、「時鳥なく音たづねに」の歌で、先を越される。返歌を、「(清)宰相の君書き給へ。」と言うのを、(宰)「猶ほ、そこに」など、言ふほどに、「雷雨になる。「局」の内外に迫る、「実間」の場は、女房たちの「座」を揺(ゆす)ぶる。「かみ(雷神)も、おどろおどろしく鳴りたれば、ものも覚えず。唯おそろしきに、御格子まわり渡し、感ひし程に、歌の返りごとと忘れぬ。」それでもなお、「ただ今その御返りごと奉らむ」と言つて、「取りかかるほどに、「殿上人たちが、雷雨の御見舞に来る。「西面(にしおもて)」に出て、ものなど聞ゆるほどに紛れぬ。」と書き留めてある。

「源氏物語」に、「須磨には、いとど、心づくしの秋風に、海は少し遠けれど、行平の中納言の、「関ふき越ゆる」と言ひけむ浦波よるよるは、げにいと近く聞えて、またなくあはれなるものは、かかる所の秋なりけり。」(「須磨の巻」と、紫式部の捉えた、「あはれ」の姿も、清少納言が捉えた、「をかし」の姿も、「局」の「

座」に標識される、「ほど」「もの」は、「座敷」の文芸、ないし芸能として、中世的幽玄性の場に承接継がれている。世阿弥の作といわれる「井筒」(「井筒の女」)は、「本説」として、「伊勢物語」(第二十二段「筒井筒」)を題材に、「昔男」を業平、「女」を「紀有常の女」として脚色されている。「閻伽の水」を飲んで古塚に手向ける里の女性、旅僧に、旧跡の由来を質問されて、「今は遙に遠き世の跡」と答える。両者の対話が掛け合いの形で進展する。(里女)「主こそ遠く業平の、」(旅僧)「跡は残りて、さすがにいますだ」(里女)「聞えは朽ちぬ世語を」(旅僧)「語れば今も」(里女)「昔男の名ばかりは在原寺」と説く。脚色の構想は、物語的発想と、説話的発想を交錯させて展開する。里の女性は、前場で消え、後場には、「さながらみ見えし、昔男の冠、直衣は、女とも見えず。男なりけり、業平の面影見ればなつかしや。」と、美女男装の倒錯美を演出し、業平への思慕の情を傾けた、移り舞として展開する。「今」と「昔」を交錯する説話的発想の間にも、「昔在原の中將、年経て此処に石(いそ)の上(かみ)、古りにし花の春・月の秋とて住み給ひしに」と、物語的発想を連ねて、「河内の国に知る人ありて」と、「昔」と「今」を、物語の場面で展開する。

雪の夜を、「局」の内に座して、「物語などするほどに、暗うなりぬれば、こなたには、火もともさぬに、おほかた、雪の光、いとしろう見えたるに、火箸して灰など掻きすさびて、あはれなるも、をかきも、言ひ合はせするこそ、をかしけれ。」(「枕草子」第一七八段)「時々かやうの折、覚えなく見ゆる人」も座に加わり、「いと

をかしう、」とある、「言ひ合はせする」「座」は、世阿弥のいう「座敷」の「座」に通じる、幽玄性の場であり、ここに、日本文芸における中世的発想の劇的場面に通じる系譜を見出す。これに「敷」の意義があることを強調したい。世阿弥は、「花伝書」(第三「問答条々」篇)に、「此の道は、ただ、花が能の命」と説き、(第七)「別紙口伝」篇には「花は、見る人の心に珍らしきが花なり」と、論じて、「申楽(さるがく)も、人の心に珍らしきところ、すなはち面白き心なり。」「花と、面白きと、珍らしきと、是れ三つ同じ心なり、」と述べている。

この「面白き心」は、「言ひあはせするこそ、をかしけれ」の「をかし」に遡ることができよう。「言ひ合はす」というのは、詩的発想の場を構成する対話性の展開である。言語行為における詩的発想である。

結 「座」の時代的構造

「敷」という語は、周知の如く、「古事記」、「万葉集」に、「ももしき」と、言われ、「毛毛志紀」「百機城」と書かれ、「百敷の大宮処」、「百敷の大宮人」或いは、「宮柱太敷きます」「天皇の敷きます国」など、「敷」の語意には、「構える」「領知する」「占める」などの意義がある。この「敷」の意味づける、「局」の構成は、「座」の意味の変動に伴なう、文芸、ないし芸能の、詩的発想の面に、時代的意義をもたらすのは、当然の事である。

明衡の「新猿楽記」に記述されている、「猿楽之態・鳥辯之詞、

莫下不斷腸解頤者上也」といった状況は、それが、文化の生理・生態に係る限り、詩人の眼には、常に鮮烈な印象として受け留められる。清少納言が、道隆の「さるがう言」する様—淑景舎(道隆の二女原子)が春宮に女御として参入する慶事—を背景に捉えた場の描写は、生動している。世阿弥が、「問の狂言」の幽女性を強調した意味に通じるものであろう。「敷」の標識に見出される「もの」の生理が「ほど」を通して、「実問」の場を捉える。「源氏物語」の紫式部は、光源氏が「夕顔」の宿を「玉の臺」と対照的に、「見入れの程なく、ものはかなき住居を、あはれに、ゞいつこか指してゞと思惟する実問として転換させている。「世の中は、いづれか指して我がならむ、行き止まるをぞ宿と定むる」(『古今集』)と、「思はしなせば、玉の台も同じ事なり。」(『夕顔の巻』)。この境地を、「行き暮れて木の下蔭を宿とせば」と歌った、『平家物語』の悲劇の主人公忠度の境地と、比較すべき条件はない。ただ、共通するものは、「座」の時代的意義が、「局」と「座敷」を歴史的に連帯づける「敷」の文化生理として、「もの」と「ほど」を実問的発想の場において、いかに表現、ないし演出しているかの点である。

中世の商工業者の「座」が、⑩「本所・領家を仰ぐこと」によって、それぞれ、その特殊の維持を図った如くに、諸芸能者も、「座」によって、組織を固めた。『新猿楽記』に観られる如き芸団は、⑨「座的結合に至らず。」鎌倉時代に入って、「宮座の影響」を受け、「地方村落に基礎をもつ猿楽座の成立」を観るに至った。

世阿弥は、『花伝書』に、「一座」「当座」といった語を屢ば用いている。「座」の有する時代の意義は、然ることながら、「局」

の環境から発展した「座」の性格、ないし意義を重視すべきであろう。「座」の意義は開放的に拡大された。「座」が「敷」を通して拡大されたのである。大衆性を帯びるに至った。中世的性格の構想である。

参 考 文 献

- ① 池田 亀鑑 『中古文学概説』(久松潜一編 『日本文学史』(中古篇) 九頁)
- ② 池田 亀鑑 『平安朝の生活と文学』 三六頁
- ③ 中村真一郎 『王朝の文学』 八一・八二頁
- ④ 久松 潜一 『日本文学評論史』(総論・歌論篇) 七三・七四頁
- ⑤ 亀谷 『世阿弥の風体文芸論』(九州女子大学紀要)(第三卷第一号)
- ⑥ 荒木 良雄 『狂言』 四八、四九頁
- ⑦ 茂山千之丞 『世阿弥十六部集評釈』(下) 二七四頁
- ⑧ 能勢 朝次 『能楽源流考』 八〇頁
- ⑨ 能勢 朝次 『能勢 朝次』 八〇頁
- ⑩ 尾形 龜吉 『中世芸能文化史論』 二五三頁
- ⑩ 林屋辰三郎 『中世文化の基調』 一四八頁